



Title	カルトからの回復：境界(バウンダリー)の再構築
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	日本脱カルト協会会報, 10, 4-21
Issue Date	2006
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/17101">http://hdl.handle.net/2115/17101</a>
Type	article (author version)
File Information	脱カルト会報10.pdf



[Instructions for use](#)

## 要約

本稿では、カルトからの回復とはいかなるものかを原理的に考察する。その際、アメリカのカルト・リハビリテーション施設であるメドー・ヘブンのプログラムを紹介することで、より具体的な回復のプロセスを示そうと考えている。

カルトの問題性は人間と社会の存立基盤を破壊する行為と措定される。従来、心理学的な人格変容や精神操作と捉えられてきた勧誘・教化プロセスを、社会システム論の立場から境界侵犯という概念により捉え直したい。身体・精神・社会の三つの次元における境界(バウンダリー)が侵犯されることによって、人は精神の自立性を失い、特定集団の指導者や組織に従属するようになる。カルトからの回復とは、失われた境界を取り戻し、自己を確立し、他者や社会と適切な関係を結ぶことであると考えられる。

筆者に境界の概念を示唆してくれたのはメドー・ヘブン所長のパードン氏である。事例の箇所では、メドー・ヘブンのプログラムに関して聞き取りや資料を交え、精神的な回復と社会復帰への道筋を紹介する。カウンセリングの世界でも共依存の状態から離脱するための指針として、社会関係の境界を明確にしたうえで親密な関係を家族・友人・職場の人々と結び合うことが説かれているようである。この発想はカルト問題にも十分応用可能ではないか。抽象的な議論に苦手の方は、カルト・リハビリテーションの報告である5節から読み始めてもらった方が、前半の原論的部分をよく理解できるかもしれない。

## 1 カルトの問題性とは何か

カルトの問題とは何か。「洗脳」「マインド・コントロール」「人格破壊」「性暴力」「信教の自由の侵害」「詐欺」「テロリズム」等々。およそ、カルトの問題性を新聞の見出し風書き出しただけでも幾つもの言葉が出てくる。これらは、カルトを社会問題として形容し、告発するアピール性の高い言葉である。カルトは、宗教法人や社会組織一般に期待される倫理的高潔さや順法精神を欠くだけでなく、参加しているメンバーの心身に多大の危害を加えるために、問題となる。平常な市民生活が脅かされるのであれば、放置できない。一般市民に訴える言い方としては、このようにカルトの外形的問題性を列挙するしかない。

しかし、違法行為と判決が下されるまでには至っていないが、カルトの組織的特性に内在する問題もあり、それは宗教組織に通底する問題をも含み込んでいる。カルトとは元来が礼拝・祭祀を意味する言葉で、世間からは奇妙に思われる小規模の祭儀集団というのが、カルトの教団類型論的特徴である。カリスマ的指導者による新しく創始された宗教集団であるから、既成教団には異端視されることもあり、参加者の精神状態が疑われることもままあった(櫻井,2005)。しかも、既成社会・教団・信者家族・地域社会と軋轢を生むこと

が多いために、教団はいずれ世俗社会からの撤退か、同化か、攻撃を選択することになる (Bromley, 2002:11-26)。アメリカのような広大な土地であると、モルモン教のように撤退後、独自の王国を築くことが可能であるが、エホバの証人のように同化しつつも一般社会の内部に宗教コミュニティを作るところもある。攻撃を選択する教団は殆どない。心理療法と詐欺的商法をミックスしたサイエントロジー教会や、統一教会のように人と金を巧妙に集める教団は、ある意味で社会に敵対しているが、世俗社会への優越性や憎悪をむき出しにするほど愚かではない。その点において、オウム真理教は宗教的テロリズムを実践した世界的にも希有なカルトである。麻原原理主義者主導の教団が未だ残存していることも含めて、オウムは宗教史に名を残した。

このような宗教集団としてのカルトを説明してみても、やはりカルトと社会との関係を軸にカルトを論じることに変わりはなく、カルトを人間の経験や生活との関係で特徴づけるものではない。おそらく、カルトを経験した人達にとって「マインド・コントロール」ほど、自分たちの経験を表現し、なお、だましたものへの怒りを示せる適切な言葉はないだろう。この点を十分に踏まえた上で、もう少し別の側面から、マインド・コントロールと概念化される事柄の中身を考察してみたい。

筆者は社会学を専攻している。すぐに分かると思われるが、社会学の認識論及び調査分析の最小単位は社会である。社会は具体的な人間の相互行為の場であると同時に、認識上の表象でもある。相互行為というのは、相手の意図や行為を予期しながら、情報や感情を交換し、共同の行為を行うことである。社会心理学的発想では、説得という行為には、説得を行うもの、受けるものという弁別があり、個人の認知過程に関与する外界からの刺激が問題にされる。それに対して、社会学は個人という単位で人間を見ずに、関係ないしはシステムとして状況を認識する。そのため、マインド・コントロール、すなわち他者からの影響力の行使という個人主体の捉え方は殆どなされない。むしろ、刺激を受ける受け手の能動性も含めた相互作用が全体として概念化されることになる。マインド・コントロールされたという言い方には、指導される/領導されることに関わる指導者と指導されるものとの間の相互理解が破綻し、一方的な働きかけであったという認識が表現されている。

このような概念的思考を宗教集団の入信過程に適用すると、どのような相互行為によってマインド・コントロールされたという状況に至ったのか、マインド・コントロールされた状態とはどのような関係が指導者と信者間で成立し、どのようなシステムが信者を従属的状态に留め置くのかということが問題にされるだろう。社会心理学が、マインド・コントロールを説得の技法や心理過程として、善悪関係無しに研究しうるように、社会学も社会学的論法で議論可能であるし、筆者もカルトの関係・構造論の問題を追及してきた。

ところが、マインド・コントロールの評価をめぐっては、社会学独自の発想が議論を攪乱してきた経緯がある。法学や倫理学は元来が規範的な学問であるが、心理学や精神医学も人間のモダルな状態（平均的反応、健康的状態）を想定する。正常があるから異常があり、規範があるから逸脱がある。社会学は、規範的学問ではないので、加害/被害、善意/

悪意、利益/不利益という評価を行わないし、正常/異常、健康/病理という評価の基準もマジョリティ/マイノリティの権力関係に由来するラベリング（名付け）であると考えてきた。それは確かに差別問題の構造を暴露し、権力の恣意性を批判するには有効な視点であったが、これをカルト問題にまで適応してきたのがカウンターカルチャー世代の宗教社会学であった。つまり、テクノロジー・官僚制社会の批判や、宗教的マイノリティの新しいライフスタイルが、社会の権力層や多数派から異端視されるというわけである。そういう論理で英米系の宗教社会学者の多くは、新宗教（カルト）を擁護してきた。

しかしながら、彼等が依拠してきたラベリング論にも社会学内部で批判がある。つまり、マイノリティの権利も重要だが、社会に寄生しつつ、社会を蚕食するような集団まで許容する必要はあるのかということである。家族やコミュニティといった社会、そうした社会を支える親密性、規範・慣習、法制度を否定し、破壊する団体を認めれば、人間は社会性を失い、単なる生き物になってしまう。そうした生き物を群れとして導く指導者や生き物を囲い込む農場のような社会集団は、われわれの社会では認められないのではないか。

カルトの問題性を一言でいうならば、カルトは、社会と人間の存立基盤を根本的なところで破壊する行為を行う。これはテロリズムとか犯罪とかの具体的な危害ではない。人間が人間として、社会という場で生きることに関わる根本的な問題である。この点を明らかにするのが本稿のねらいである。

いささか抽象的な議論になったので、次節ではもう少し、経験に即した話にしていこう。

## 2 カルトに囚われるとは

カルトを経験した人達は、カルトの問題性が凝縮された言葉を聞いただけで、多くの具体的な光景が目の前に浮かんでくるだろう。見知らぬ人から声をかけられ、振り切れぬままに聞かされた驚くべき話の数々。自分の話を真剣に、全面的に受け入れてくれた信者の人達。教祖や幹部、指導者の宗教者らしい自信や慈愛に満ちた言動に魅了された瞬間。自身の理性や倫理的感性をただの「我」と見なされて叱責され、真理と指導者に従うことを誓わされた瞬間。疑念を押し殺し、疲れた身体と気持ちを引きずりながら、組織の仕事に従事していた日常。辞めてホッとした瞬間。失われた時間の重さや活動への悔悟、だましたもの達へ怒りの念を抱えながら、救済も真理も見えない世俗的些事を生活として味わっていく砂をかむような生活。どこに嘘が隠され、どこで欺かれたのか。自分はどのように変えられたのか、それとも変わらなかったのか。時間を経るごとに答えは変わるだろう。

囚われるという字は実によくできている。人が口（檻の中）に閉じこめられる。一つの閉じた思考体系・人間関係・社会空間・歴史的時間のなかに囚われるのである。なぜ、囚われてしまったのか。それを考えるために、2つの過程を分けて考えた方がよい。

マインド・コントロール、説得の心理的操作と呼ばれるものは、檻に人を入れ込む第一

の過程に関わる問題提起であった。これはスティーブン・ハッサン（ハッサン,1993）、西田公昭（西田,1995）等が十分に説明している。いったん檻に入っても出ていく人が少なくない。統一教会研究者のアイリーン・バーカーや統一教会自体が認めているように、街頭から引っ張ってきた人達のうちで複数年教団に関わるものは数パーセント以下である。第一の操作の効果はそれほど長続きしない（Barker, 1984）。では、どうして、わずかの人々は、自らの手で檻に鍵をかけてしまったのか。西田は様々なマインド・コントロールが長期間継続することによって永続的なマインド・コントロールになるという。ある閾値を超えると、人間の思考や感情の復元力が損なわれてしまい、自分の力で元に戻ることができなくなるということである。回復には外側からの働きかけ、すなわち影響力を与える環境から逃れ、精神のリハビリテーションの機会が必要になる。過剰なストレスにより、心身のホメオスタシスが乱され、復元できなくなると、防御反応として特殊な精神状態が出現するといわれている。生理学、精神医学的な説明によれば、乖離であり、トラウマの発生である。この状態にある人々は檻の中にいるという意識すら失われているかもしれない。

この説明でももちろんよいのだが、社会学的には違う説明も可能である。これから少し回りくどい説明になるがお付き合い願いたい。社会学では社会をどう認識するかということに関して 2 つの考え方がある。個人や集団間の競合・葛藤、協力・同調、支配・従属等の個別の関係から成り立っているという方法論的個人主義の発想がある。これは経済学や行動科学的人間モデルに近い。それに対して、社会は一つのまとまりを持つ認識論的、或いは実体論的システムとして捉える方法論的共同体主義の発想もある。社会学者の発想や志向性としては、基本的に共同体主義やシステム論的である。システム論に立てば、個人は社会に最初から含まれ、常に社会の影響を受けている。人は生まれながらに国家、民族、階層、宗教といったものを背負っている。慣習、規範、法律に従わなければ制裁が下る。家族、コミュニティ、学校、職場、各種団体等に属すれば、そこの流儀に従わなければならない。教育を受ければ、独善と公共的なるものの区別がつくようになるだろう。現代は非常に複雑化した社会であるが、人は所属する集団、身の回りの人々と、社会的（法律的）に、文化的（倫理的）に適切な関係を保ちながら、自分の生活を維持しているのである。

このような社会システムにおいて重要なことは、全体の社会システムに包含された下位のサブ・システム間の境界維持とコミュニケーションである。個人も社会のサブ・システムである。自己と他者、自分の家族と他人の家族、自分の会社と他人の会社、自分の国と他人の国、それぞれに境界が維持されることで、自己のアイデンティティや自立性が確保される。自分のものと人のものを区別しないのであれば法は必要ない。しかし、そのような社会は歴史上存在しなかった。共同体といえども、身分や地位・役割の差異に基づく境界は必ずある。境界の維持が社会秩序となる(中,1999)。

もちろん、サブ・システムが相互に接触を持たず、境界を閉鎖してしまうことは通常あり得ない。人と関わりを持たずに成長することは難しいし、家族・親族の義理を一切絶つのは生活の安定性を欠く。商売、取引をしない会社はないし、貿易を一切しない自力更生

型の国家もこれまで存在しなかった。当然のことながら、歴史上、コミュニケーションの方法にはルールが事細かに決められてきた。思いやり、扶養の義務、商道德、国際法等、法的強制力はなくともそれなしには関係が取り結べないモラルというものがある。なお、ここでいうモラルとは、共栄共存をめざす極めて功利的・現実的なものである。

さて、カルトは、境界維持とコミュニケーションのモラルを破壊する。この点が大いに問題なのである。カルトというシステムが別のシステム、すなわち、他者、他人の家族、他人の組織、他人の所有物を呑み込もうとする。境界の侵犯である。会社のM&Aにはルールがある。しかし、カルトのシステム侵犯にはルールがない。他のシステムとコミュニケーションする際も、先に述べたようなモラルがない。そんなことは最初から分かり切ったことだと思われるかもしれないが、このシステム論的発想でカルトに巻き込まれ、囚われていく心理過程を考察してみると、なぜ、人はカルトから抜け出せなくなってしまうのかという問いを別の方向から考えることができるかもしれない。

### 3 ハラスメントにおける境界（バウンダリー）の侵犯

システム論的な心理療法のアプローチは、個人の精神的問題を考える際、個人の内的病因の改善を図るよりも、個人の精神を吊り下げている人間の関係性に働きかけた方が、即効性があるという発想から来ている。専門外であるからこれ以上は述べないが、現実に即したやり方だと思われる。筆者は学生・大学院生を指導する際、個人の内面には殆ど入り込まず、当面の問題解決の指針だけ示すことにしている。それ以上の関与は往々にして問題を生み出す。昨今、大学教員が学生の勉学や生活を指導と称して管理下におくパワー・ハラスメントが問題になる。その要因の大半が、教員が学生をトータルに指導できるという錯覚に基づく。不適切な時間・空間における指導を熱心さと勘違いし、そうした指導を学生生活全般に及ぼそうという家父長制的な発想が問題になる。教員と学生との適切な境界維持を可能にする教育システム上の欠陥も同時に問題とされるだろう。

二十数年前、筆者が大学院生の時代は、一つの学問分野につき、主任教授(1)－助教授・講師(1,2)－助手(1,2)－博士課程・修士課程の大学院生(十数名)－学生(2,30名)という階梯性をしく講座というものがあつた。現在でも古い大学では温存されている。講座自治という聞こえがよいが、学問的権威による家父長制的な支配が貫徹しており、上位者が下位者を選抜し、他講座は人事や教育指導に一切口を挟めない。大学院生の生殺与奪の権限は教授に握られていた。研究テーマの設定、論文・学会発表の指導、就職の斡旋等、教員の口添え無しに進むことは一つもない。権威主義な教育の難点は、教育制度やシステム以上にパーソナルな関係がものをいうため、皆が人間関係の維持に常時腐心せざるを得ないというところにある。逆にパーソナルな関係さえうまくいけば、その恩恵は計り知れないという側面もある。支配－被支配者の間には共依存的な関係も見られ、学閥として利権集団に発展している場合は、下位のものであっても意図的に境界を操作する。

パワー・ハラスメントとは、このような大学の研究室特有の支配・被支配関係において、互酬性に関わる了解事項が破綻したことを示す今日的な言葉であろうと思われる。学問自体がボーダレス化し、大学が研究者養成の独占機関ではなくなっている。少子化で大学は縮小期に入っている。就職先の間口が減少しているにもかかわらず、大学院生の数は文部科学省の政策により倍増した。大学院生の就職予備軍の数は年々増加の一途をたどる。チャンスは辛抱強い多くの人々よりも、卓越した能力を示す少数の異端児のような人に与えられる時代になった。こうして講座制が長年培ってきた学問の再生産も、権威主義的な教育システムも崩壊しているのである。この点を理解し得ない旧時代の大学人が、パワー・ハラスメントを行い、なんで学生・大学院生が怒るのか未だに理解し得ていないのである。

このような問題を解決するためには、境界維持の発想が役立つ。境界 (boundary) の概念は、ヘンリー・クラウド/ジョン・タウンゼント『境界線』(クラウド/タウンゼント, 2005) で紹介されている。この本は夫婦・友人・職場関係におけるシステムの境界維持とコミュニケーションのやり方に関して、アメリカ的な自立性を重視するモラルと他者への聖書的配慮を土台に人間関係論を述べたものである。ハラスメントとして告発される内容の中身は、明らかに境界の侵犯である。一例を挙げよう。妊娠した大学院生が指導教員に出産予定を報告すると、露骨に研究者の自覚がないと叱責された事例がある。これは女性教員が女性の子育て負担を考え、また、この時期に研究業績をあげないと就職戦線に生き残れないという、昔ながらの親心からの叱咤激励であつたらしい。しかし、大学院生はプライベートな生活に干渉されたということを大学院生協議会に報告し、協議会は学内の関係委員会に告発し、教員の指導姿勢の再検討を全学的に求めた。この場合、個人的評価は不要であつた。勉学を中断しなくてもいいような状況に周囲のサポートがあるかどうかを尋ね、教員側で可能な支援をアドバイスして済む話である。いずれにしても、役割と立場に応じた境界の維持を尊重しない限り、問題は発生する。

およそ専門職従事者は、定められた場所で、定められたやり方により、社会的に相当な対価を得て専門技能や知識を教示・提供すればよいのである。定められた領域外にまで専門家としての権威で恣意的に介入するから問題が発生する。しかし、教育・医療・宗教においては、関わる対象者の身体と精神の諸活動全般に及ぶために、対象者の境界を侵犯する可能性が他の職業よりは高い。それゆえ、高度のモラルとバランス感覚を求められる職種ともいえる。このことは対象者側にある学生・患者・信者としても十分に自覚が必要な点である。つまり、教師や医者、宗教家に過度に依存しない。問題となった事例は、過度に依存するように専門家が対象者にしむけた場合が少なくないが、対象者側が過度に依存したために専門家が増長し、依存と支配の関係を強化しようとした場合も見受けられる。

クラウドとタウンゼントは、夫婦、親子、友人、職場や近隣の人々との関係においても、自立した個人として相手の意向を尊重し、同時に配慮や愛情によって関係を維持することを強調する。先に述べた専門家と対象者との関係には、家族・親族や友人間のような親密性や愛情はふつう発生しないのであるが、精神医療・心理療法や宗教を媒介とする人間関

係には親密性が発生しやすく、このために互いに自立した人間として境界維持を継続することが難しくなるのである。カルト問題の発生は、殆どがこの2つの領域に限定される。

#### 4 カルトにおける境界の破壊

境界とは心理的境界の問題として、近年人間関係に悩む人々を支援する際に注目されてきた概念である。筆者は社会学的なシステム論の観点からこの概念を拡張し、境界侵犯にこそ、カルト問題の核心があるのではないかと考え、前節においてハラスメントと境界侵犯との関係を考察した。本節では、カルトが、この境界を意図的に破壊し、自他の区分をなくし、特定個人や集団にメンバーを従属させている状況に関して説明を加えたい。

生命システムとしての身体は、自己と他者の原理的差異性、区別を生み出す。親子であっても身体・精神共に異なるシステムに属している。人間の成長はこの差異性を確認して、自己を確立し、自立した一身体として他者とコミュニケーションすることにあるといっても過言ではない。それゆえ、身体的な境界は尊重されるべきだが、教祖と信者の身体的距離に自覚的でない教団がある。男性教祖・聖職者と女性・子供の信者との間で、信仰的愛情や指導者への忠誠を利用して従属的献身を身体や精神レベルで要求することがある。

ジャネット・ジェイコブ (Jacob, 18984) は愛の経済 (交換) という論文において、カルトの教祖が信者に対して無償で与えるとされる真理の恵みと真実の愛が、信者から忠誠心や献身的態度を引き出す交換関係に注目している。信者には、彼等が教祖の恩典に対して報いることなどできない無知でちっぽけな存在であると自覚するよう指導される。このような絶対的な不均衡の関係において、時折男性教祖が女性信者に性的関係を受け入れるよう迫ることも、教祖が特定の信者に示す最高の愛情・恩恵と認識されるのである。教祖や幹部は性的関係と子供を産ませることで女性信者を服従、依存状態に陥れる。その典型例はアメリカのモルモン教徒の流れをくむ複婚主義者達だが、カルトにおいて女性信者の性的虐待は頻発する。男性信者は複婚の共犯者になるか、教祖からの愛を受けた女性を配偶者に割り当てられることで疑似家族的コミュニケーションに包摂される。

家族的観念で擬装された宗教共同体は、現実には信者の性的自己決定権を奪っているのであり、生命システムの再生産機能が統制されているのである。そして、そこには愛という宗教的理想と人間的な親密性の感情が利用されている。自己の身体に裁量の権限が認められなくなる状態では、身体的暴力が発生しやすい。教祖や幹部等の組織上の上位者は下位者の身体を自己に身体に帰属するものとして境界侵犯を行っているからである。

ところで生命システムの侵犯に至る前には、それを受忍させる状況に下位者を追い込む過程が存在する。身体への直接的な暴力を露骨に行うのが犯罪であり、戦争である。それに対して、カルトでは間接的な暴力を行使する。精神のシステムに対する働きかけである。これがマインド・コントロールと呼ばれるものであるが、そのねらいは、精神的な境界の破壊である。人格破壊とか人格変容というように個人単位で考えると、破壊の意味すると



ころが不鮮明であるし、経験や時間の流れにおいて変容するのは当然という批判を招く。

精神的境界とは、自分と他人の人格、精神性において差異と自立を認めることである。カルトでは、信者の精神的自立を認めず、教祖に対して信者を従順な状態にとどめおき、教祖や教団のアイデンティティに信者の精神を組み込もうとする。歴史上、最も大規模かつ組織的に指導者崇拜と組織への忠誠を誓わせてきた例が共産主義国家群（ソ連の革命・粛正、中国の文化大革命、カンボジアのクメール・ルージュ、北朝鮮の主体思想等）であろう。新左翼のセクト運動もそれらの先進的事例に学んだが、連合赤軍の集団リンチ事件に集約される無惨な成果しか得られなかった。

宗教的カルトや政治的セクトは、メンバーの自尊心を打ち砕く。もちろん、新規のメンバーをリクルートする際は参加者をおだてて褒め殺しにする。いわゆる社会心理学でいう承諾誘導の心理操作である。ここまでは世間一般で見られる。そして、参加者がメンバーになろうとして自分でドアを閉めたときから、自尊心への攻撃が始まる。宗教・政治的な知識や理解が欠落していることを繰り返し指摘し、包括的・全体的な知識を希求させる。しかし、能力や知識のなさを自覚させることで向上心を刺激することはできても、自我の核にある自尊心を揺るがすまでには至らない。自尊心が毀損されるのは、羞恥心を捨てさせられた時である。ナチスは収容所に送った人々の衣服を剥ぎ取ることによって即座に反抗心を奪うことに成功した。カルトやセクトは精神を裸にする。個人的な、人間的な欲求、感情を、指導者やメンバーの前で告白させられる。秘密を奪われた瞬間に、自己の精神的スペースが失われ、上位者や他のメンバーと精神的に融合してしまう。

そのあとに、理性や自身の倫理観にこだわる行為に対しては、組織や全体のことを考えない身勝手なこととして徹底した批判がなされる。そのような発想を生み出す自我の存在自体が悪と非難され、卑小な自己を捨てて大義に殉じることを懇請ないしは強要される。この他にも羞恥心や自分を捨てさせる様々な儀礼的行為がカルト・セクトごとに見られる。こうして、集団の教条に対して半信半疑でありながら、自我が壊れかけたものを活動に巻き込み、共犯関係に陥れ、後戻りできないよう思わせるのである。そうすれば、そのものはドアに自ら鍵をかけることになる。

身体と精神を組織に奪われた人々という想定は、カルトやセクトを容認する人達には納得できない説明かもしれない。自分の意志で入り、留まるものがあるのではないかと。しかし、先に述べた共産主義体制の下、それぞれの国で数百万の人々が生命や名誉、財産、家族等を奪われたという事実を考えたときに、一部の熱狂主義者を除き、国民の多くがこれらのことを納得していたとは考えにくいだろう。同じように、カルトやセクトにおける指導者や幹部が一般のメンバーを搾取する状態と、そこから逃れてきてこのような集団を告発し続けている人々の証言を併せて考えてみよう。自由意志や好きでやっているというような想定に意味のないことは明白である。確かに、カルトやセクトは亡命するまでもなく、いつでも離脱できる環境にあるという意味で、自由度はこれらの国民より遙かに高い。それにもかかわらず、逃げ出さない理由が分からないという疑問は再度出されるかもしれ

ない。しかし、外側に自由な世界があるという想定がカルトやセクトの場合には極めて困難な事情がある。この点を集団と社会システムとの境界喪失の問題として説明しよう。

社会的境界は、所属組織と外部社会との境界である。カルトやセクトには集団固有の教義や教条、メンバーの統制手段がある。それらは外部社会の市民社会的な価値や社会的ルールとは大きく異なるために、システム間で情報や資源が交換されることはまずない。これらの集団が外部社会から資源を動員するためには、外部社会や他集団にとって有益な事業をなし、衆目の関心を惹きつける必要がある。ところが、他の集団では代替不可能な崇高な目的と行動が自分達にはあると確信しているために、カルトやセクトは外部社会の価値判断や他の集団のクレームに関心を払わない。人間と世界を救済する独自の論理に従い、外部世界に働きかけようとする。自己のシステムが外部システムに優越していることを確信している間は、メンバーが外側の世界に憧れることはない。だから、外部から見ていかに搾取されている状態にあらうとも脱出しようとは思わないのである。しかし、ほどなくこのやり方では成功しないことに指導者・幹部・信者共に思い至る。そうして、カルトやセクトはシステムの論理を次のようなやり方で組み替えていく。

第一に、集団システムを外部社会のシステムに適合的に調整する事例である。新宗教集団の多くはこの経過をたどり、既成宗教への道を歩む。当然のことながら、教団の凝集性は弱まり、メンバーは一般の社会人と殆ど変わらない人生観や生活様式を持つに至る。この経過をたどる教団は、元来が外部社会の世俗的価値観を含み込んでいたと考えられる。日本の大方の新宗教は、教義や儀礼の新奇性はともかく、通俗道徳的価値観を有している。

第二の類型は、集団の価値体系に独自性が強いために外部社会との調整を断念して、集団の独自性を維持するために、社会システム全体から逃避することで自己のシステムを維持しようとする事例である。生存能力があり、環境に恵まれれば、宗教的コミュニオンを形成できる。多くは広大なアメリカ大陸におけるモルモン教徒の分派や、アーミッシュのような独自性の強いプロテスタント教派であろう。集団としての規模が小さく、逃避先が見つからない集団の場合は、指導者の死や組織的危機の際に集団自殺などにより、現世以外の世界においてコミュニオン形成を夢見る例がある。人民寺院や太陽寺院である。

第三の事例は、自己の組織を絶対化し、外部社会に存在意義を認めない強い集団である。その場合、集団の理念を宣教し続け、様々な形で社会的浸透を画策し続ける組織型宗教がある。統一教会やサイエントロジー教会が典型的であろう。教義のカリスマに依存し、明確な宣教戦略や教義の体系を持たない集団の中には、オウム真理教のように終末を自作自演するものもある。

組織からの脱退・脱会は、第一から第三の事例にいくほど難しくなる。既成化した教団の場合には、システム内部と外部との価値的差異は小さくなり、家族において信者と非信者が混在することすらある。宗教的コミュニオンの場合には家族ぐるみで隔離された生活史を形成してきたために、二世以降の世代が外部社会に脱出する敷居が高い。離脱は家族を捨てることを意味するし、何よりも外部社会への適応に相当の期間と労力を要する。再社

会化が必要になる。このような社会復帰がより困難なケースが社会と敵対関係にあったカルトである。外部社会を破壊することに費やしていたエネルギーを急激に社会作りといったプラスの方向に転換することは簡単ではない。自責の念によりポジティブなエネルギーまでも喪失してしまうか、このような感覚を持ってないレベルにまで、徹底して自己を持たない生き方に適合してしまっている場合が多い。或いは生き直すには遅すぎるという諦念もあろう。もはや、組織に依存する生き方が一番楽なのである。

## 5 カルトからの解放と社会復帰

カルトからの解放とは、破壊された「境界」の回復に他ならない。境界を持つことで、人はアイデンティティと自尊心を得ることができる。社会から宗教コミュニンに閉じこもっていた人が社会復帰を果たすまでには幾つものステップがある。その過程は、まだ十分研究されていないし、リハビリのための支援態勢も十分とは言えない。今後、日本でも精神医療・心理療法に関わる専門職の方がこの領域で活躍されることを期待したいが、その一助としてアメリカの事例を紹介したい。

ボストン郊外のレイクビル駅から車で数分の距離にメドー・ヘブン（Meadow Haven 草地の避難所）がある。田園地帯のデイ・ケア・センターを改築した建物に 5,6 名分の宿泊施設と会議室、事務所（ニューイングランド宗教情報研究所）が敷設されている。

ロバート・パードンとジュディー・パードンの夫妻が所長と副所長・カウンセラーを務めている。ロバート・パードン氏はデトロイト出身で、ミシガン大学で宗教学、マサチューセッツ州のゴードン・コンネル神学校で神学（牧師学）の修士号と取得し、同州で 8 年間牧師に従事、後にプリンストン神学校で倫理と牧会学に関わる神学修士号を得た。彼はニューイングランド宗教研究所の創設メンバーであり、現在はメドゥー・ヘイブンの所長である。年間を通してカウンセリング、セミナー、講演活動に忙しく、この 5 年ほどはキリスト教関連の宗教コミュニンの元メンバーをケアしている。彼の妻のジュディー・パードン氏は、マサチューセッツ大学で心理学と教育学を学んだ後、12 年ほど小学校教師として働き、その後、ニューイングランド宗教研究所の創設に参加し、現在はメドゥー・ヘイブンの副所長である。

施設設立の経緯は次の通りである。1996-99 年にかけて、虐待的集団の元メンバーを一時的に待避させる家を探していた。1999 年にメドー・ヘブンの現在の施設が見つかり、所有者に事情を話したところ売却に応じてくれた。しかし、長らく閉鎖されていた老人ホーム施設は荒廃しており、ボランティアの手を借りて修復した。2000-01 年にかけて、資金不足により修復も滞り、売却予定であったが、資金が調達され、02 年によく完成した。同年 9 月によくスタッフが入居し、活動を開始することになった。1999 年当時の写真から現在の施設は想像できないほどの改築ぶりであり、様々な職種の元メンバーやボランティアの働きが偲ばれる。

パードン夫妻からの聞き取りと寄贈された資料（本文内括弧、全てメドー・ヘブンが作成したもの）により、メドー・ヘブンにおける治療の概要を紹介しておこう。パードン氏は、自ら連絡してきた脱会者にプログラム参加の可否を面接で審査し、個々人に応じた回復とコミュニティ参加の社会復帰のプログラムを数ヶ月間実施する。脱会者のトラウマに配慮し、身体と精神の回復をめざす。

#### 公式治療の方針 (Meadow Haven's Formal Treatment Philosophy)

計画の 2 割がメドゥー・ヘイブン独自のもので、残りは心理療法で通常使われているものを組み合わせている。

治療の目的は、自己卑下の状態から、自己の尊厳を回復し、社会生活に戻ることにある。治療期間は、4-6 ヶ月である。

カルト・リハビリテーションの内容は、大半が心理療法である。既に脱会した者を対象にしているのであるから、脱会カウンセリングに含まれるカウンセリング事項は極めて少ない。特定集団からの解放ではなく、入所者が囚われていた心理状況からの解放なのである。アメリカのカウンセリングにおいてオープンに論議され、専門家が関わる領域が心理療法であり、どのようにして特定集団から信者の脱会を促すかといった話は殆ど聞かれない。

入所者が自らメドー・ヘブンの門をたたくこともアメリカのカルト・リハビリテーション施設の特徴といえるであろう。その意味でも、ここでの心理療法は、脱会カウンセリングの延長にあるとは言えない。入所者は自らの意志でリハビリテーションを受けることに同意し、その意欲と能力を備えていることを入所前に示さなければならない。入所の申請様式を見てもらいたい。

#### メドゥー・ヘイブン申請様式 (Meadow Haven Application Form)

##### 1)表紙

\*氏名、年齢、出生年、住所、連絡先

\*婚姻の有無、家族構成、家族住所

\*メドゥー・ヘイブンに直接申請に来て面接を受けられるかどうか

##### 2)集団加入の経緯 集団名、指導者名、勧誘年月日、加入期間、離脱年月日

##### 質問群

(当該集団加入の状況)

1.どのようにしてその集団に出会ったか。最初の出会ってから本格的な加入を決心するに至った期間はどのくらいか。

2.なぜ、その集団に加入しようと思ったのか。その集団から離れようと思った理由は何か。

- 3.その集団の指導者と幹部名を挙げなさい。
- 4.その集団でどのような役割を持っていたのか。集団の所在地はどこか。
- 5.その集団に加入してきた期間、家族や友人とどのような意思疎通を図っていたか。
- 6.脱会后、その集団から何かコンタクトがあったか。あれば、その内容を教えてほしい。
- 7.その集団に加入した後、あなたにどのような変化が生じたか。
- 8.なぜ、メドー・ヘブンがあなたにぴったりのところだと考えたのか。ここでどのような問題を解決しようと考えているか。

(治療経緯)

- 9.セラピーを受けた経験はあるか。その期間と効果について教えてほしい。
- 10.どのような問題をあなたは抱えていたのか。
- 11.心理テストを受けたことがあるか。どのようなものであったか。
- 12.メドー・ヘブンを出た後、どのような環境で生活していくことになるのか。

(家族の状況等)

- 13.できるだけ家族的背景に関して説明してほしい。家族で大切だった人、或いはそのような家族の関係がなかったことなど。
- 14.家族ではどのようなコミュニケーションのやり方をしていたか。けんかや仲違いで家族の溝が生まれたりしたのか。なにか重要な変化があったのだろうか。
- 15.家族にアルコール・麻薬中毒のものがいたか。誰かに性的虐待を受けたことがあるか。あるなら、そのあと、あなたはどのように変わったか。できるだけ家族の雰囲気を見せてほしい。
- 16.あなたにとって重要な人間関係、夫婦関係、友人関係、親戚の人達などを話してほしい。
- 17.家族で特定の宗教団体に加入していたことはあるか。
- 18.その集団に入る以前に、あなたは宗教的信仰や信念を持っていたか。今それはどうなったか。

(健康に関わる情報)

- 19.ここで回復のプログラムを受けるに際して、健康上の問題(糖尿病、発作等)があるか。ある場合は、メドー・ヘブンに来る前に詳しい症状を教えてください。

(管理・経費に関わる情報)

- 20.あなたは現在、就業しているか。職業は何か。
- 21.当所への入所費用は、月におよそ1,700ドル(20万円程度)である。これらの経費を支払うことが可能か。(貯金、支援者、教会の支援、パートタイムの仕事をする、派遣団体等による負担)入所後、法的拘束力を持たないレベルの契約書を交わしてもらうことになる。

3)現在の心境に関する質問 以下、各項目に5段階評価で回答  
不安、抑鬱、不満、怒り、自殺念慮、孤独感、当惑、自信喪失、悲嘆

4)付加情報

- 1.生年月日
- 2.身体的特徴（眼・髪の色、身長・体重、写真）
- 3.人種（書けるなら）
- 4.運転免許証の所持、番号
- 5.逮捕歴の有無、警察から召喚されていないか。
- 6.身体の障害、アレルギーの有無
- 7.負債の有無
- 8.アルコールや薬物の摂取で身体に問題があったか。
- 9.上記に関わる治療を受けたことがあるか。

入所者から十分な情報を告知してもらい、また、施設のプログラムについても承知してもらった上で契約を交わす。いかにもアメリカ的である。このような契約文化になじめないようであれば、アメリカの世俗社会に復帰するのは難しいだろう。予め、リハビリ可能な人々を選抜しているとも言える。団体運営資金の大半をチャリティやボランティア、入所者の治療・滞在費からまかなっている状況を考えれば、回復のポテンシャルが見える対象に力を注ぐのは当然かもしれない。もちろん、パードン氏は脱会後の困難な人生の中で十分なお金がない人にも機会を提供していると語るが、退所後に経費の返済を約束してもらうことが望ましいと述べている。要するに、自分の金と力で自分を治すという意欲がなければ社会復帰が難しいという判断である。

次に具体的な治療計画について説明していこう。入所前の審査を含めると4つのプロセスがある。

入所前

- \*カルトの元信者がメドー・ヘブンに照会する。
- \*申請書の精査により入所者の選定

I（現在）休息と安全の確保（2週間）

- \*休息
- \*検査（マイヤーズ・ブリッグズ性格指標・テイラー・ジョンソンの気質指標）
- \*思想改造問題の講義
- \*自尊心問題の講義
- \*個人ごとの回復計画作成

\*スピリチュアルな錯乱の認識

II (過去) 想起と追悼 (IIIを含めて 3-6 ヶ月)

- \*トラウマを通時的に配列：感情との接合
- \*境界線の発想を開発
  - 様々な実際的プログラムに参加
- \*カルト指導者と自己愛性人格障害の理解
- \*スピリチュアルな問題 (錯乱とカルトの信念体系)

III (未来) 再接合

- \*未来に焦点を絞る  
(教育/仕事、生活技術、社会的支援と人間関係)
- \*スピリチュアリティの明確化
- \*自己イメージの創造
- \*自己の妥当性を確認 (カルトに所属した事実について)
  - 他者にどう応答するか/自分にどう言い聞かせていくか
- \*コミュニティ参加計画の推進
  - 社会の一員として生産的活動を行う

カルトからの回復は、現在の否定的な自己イメージ (烙印を押された過去、失敗した人生) を転換するのが第一段階である。そのために、安全な場所でゆっくり休息を取ることが肝心であり、ここでは二週間をその期間に充てている。その間、かつて所属していた教団において、思想改造 (マインド・コントロール) が行われていたこと、宗教的・スピリチュアルな体験の場と見なされていた儀礼や宗教生活が正統な宗教伝統から逸脱したものであったことを学習する。統制度が高い閉鎖的集団においては思想改造が顕著であり、キリスト教や仏教・ヒンドゥー教に基づくと称するアメリカの新宗教には、様々な指導者による教義の恣意的解釈が見られる。そうしたことを認識することで、過去に自分が行った誤った選択に対して、必要以上に罪責感を感じていた自分の心の重荷を取り除くのである。

第二段階は個人の問題状況に応じて期間に長短の差がある。かなり長期間にわたる理由は、トラウマの克服と、カルト経験で破壊された境界線の認知や感覚を取り戻すことに相当の時間を要するからである。トラウマには、指導者や幹部に強いられた性関係もあれば、自尊心を毀損された様々な経験もあろう。境界線の破壊で最も被害を被っている入所者は、宗教的コミュニケーションで育った二世信者であるという。慣れ親しんだ共同所有の原則に従えば、冷蔵庫にあるものは何でも食べることができるし、そこにあるものは何でも利用可能である。ところが、現実社会では私的所有権の尊重が原則であり、権利を持つもの同士が契約により財とサービスの交換を行うのが市場社会のルールである。人のものを取らない、借

りるときには断りを入れる、借りたものは返すといった社会のルールを身につけるだけでも苦労があるという。

カルト集団内で理想化された人格は指導者の人格であるから、少なからず病理性を含んでいる。カルト指導者のナルシズムはつとに指摘されてきたことであるが、信者もその影響を受けている。自己の欲望や願望を真理や理想に投射して、現実や他者の存在を気にかけないのは指導者も信者も同じである。その結果、彼等は共同体内部で特殊な用語法を用いたコミュニケーションを行っているが、それぞれ自分の欲求を一方向的に押し通そうとしてその正当化に弁論術を駆使しているにすぎないのである。だから、相手との相互理解や意思疎通を行おうという意欲や技量に欠ける。脱会後に一般の人々と社会関係を構築する際に脱会者が感じる困難とは、特殊な用語法・弁論術を用いずに、相手や場面に応じた適切なふるまいを瞬時に自分の判断でやらなければいけないところにあるのではないか。

逆の言い方をすれば、このような社会性に問題があるためにコミュニケーションがなしえず、孤独感や疎外感を感じていた人々がカルト集団に取り込まれ、いつときは十全な人間関係を構築できたと実感していたのかもしれない。しかしながら、カルトから脱会したとたんに、最初に抱えていた問題に直面せざるを得ないのである。この問題に直面することを避けようとするれば、また同種の集団に加入してナルシズムの心理とナルシスト達特有のコミュニケーション・スキルを用いるしかない。カルト集団のはしごともいうべき現象がなぜ起きるのかは、この点から説明することもできる。

第三段階は、文字通りの社会復帰準備期間である。自分のアイデンティティを再構築するためには、未来の自分を具体的に作り上げるための体勢作り、つまり、具体的な教育・訓練、職業イメージを持ち、そのための準備作業に身を置くことが最も効果的である。

この期間は心理療法というよりも作業療法に近く、療法の段階を超えた社会性獲得のためのトレーニングである。その細かな内容は、個人のために組まれたプログラム例に示されている。

#### 個人ごとの回復計画(IRP: Individual Recovery Plan)

回復のためのプログラム

- \*実生活上の必要知識
- \*職業訓練
- \*健康・身体ケアの知識
- \*社会生活のための訓練
- \*認知的側面の訓練
- \*スピリチュアリティの再検討
- \*トラウマからの回復

実生活上の必要知識



- \*行政サービスの利用法
- \*家計・予算運用の知識
- \*投資・貯蓄・年金の知識
- \*医療・社会保障・保険の知識

#### 職業訓練

- \*一般教育修了検定（高卒資格）取得
- \*大学進学準備（大学選択、奨学金応募等）
- \*職業選択・適正検査
- \*履歴書・求職の文書作成
- \*職業相談・模擬面接
- \*ドレス・コード、身だしなみ講座

#### 健康・身体ケアの知識

- \*栄養、食習慣、料理を学ぶ
- \*衛生、健康管理を学ぶ
- \*ストレス対応法、息抜きの仕方を学ぶ
- \*職業のバリエーションを学ぶ
- \*性行為における避妊、感染症への対処を学ぶ

#### 社会生活のための訓練

- \*個人、社会における境界線を学ぶ
- \*傾聴、コミュニケーション技法を学ぶ
- \*交渉、問題解決の話し方を学ぶ
- \*子供の躰、愛情の示し方、親の境界線を学ぶ
- \*夫婦、男女関係の境界線を学ぶ
- \*エチケット、社会生活上の境界線を学ぶ
- \*デートにおける伝統的・現代的作法を学ぶ

#### スピリチュアリティの再検討

- \*聖書の読み方
- \*宗教的指導者の特性
- \*権威
- \*ガラテヤ人書（律法と福音）
- \*共同体、コミュニオン

- \*原罪
- \*罪と恐れ
- \*結婚の意義

至れり尽くせりの内容であるが、実生活の必要知識、人間関係構築のスキルがこれだけ盛り込まれていることも、アメリカ的と言えるかもしれない。家族の支援をあてにして脱会後の生活を送るという前提は全くない。できるだけ早く自立すること、そのためにソーシャルなスキルを身につけること。明快である。

もう一つ、この期間において重要なことは過去をポジティブに語れる心理状態にまでもっていくということであろう。カルト集団に所属した事実を自分にどう納得させるのか。他者にどう説明していくのか。このことを心の奥底にしまい込んで十分整理されないままにしておく、ちょっとしたきっかけで記憶や感情がよみがえる瞬間がある。その時に、これを神秘体験と解釈し、自罰傾向に陥ったり、元の集団に戻りたがったりする人が出てくる。また、他人に対して、特に自分にとって重要な人々に対してカルト経験を隠したままにしていることは苦しいことである。もちろん、問われないことを自ら語り出す必要はない。しかし、自分の心理状態や人生観を相手に理解してもらうためには、カルトに所属していたという事実は有意義な情報である。そのことを相手に理解してもらえよう語り出すことで自身の経験を客観的に整理する視点が生まれてくるものと考えられる。その支援をプログラムでなそうというわけである。

パードン氏はサポート集団の重要性を指摘する。自助グループの意義については、嗜癮治療の根幹部分ですらある。アルコール中毒の患者が社会復帰するには、医者からの指導や入院による治療では不十分であり、断酒会や AA（アルコール・アノニマス）のような自助グループに加入し、同じ体験を持つ人々の励ましを常に受けていかないと依存症の克服は難しい。カルト経験者の社会復帰に関しても、初期には同じような効果が期待される。

メドー・ヘブンは、明確にサポート集団の意義を語っている。

#### サポート集団に関わるメリット(The Advantages of Being Involved in a Support Group)

人がスピリチュアルな、或いは感情的なトラウマで悩んだ時にこそ、「知識が力となる」。サポート集団は下記の点であなたを支えてくれる。

- 1.あなたが経験したトラウマには名前がある。それを明らかにすることができる。
- 2.トラウマの特定化により、現在の問題状況を克服することができるようになる。
- 3.あなたはここで自分の経験を説明できる適切な言葉を発見できる。
- 4.あなたは今まで孤独ではなかったことを理解し始める。同じような苦難を経験した人達がいる。
- 5.あなたは自分が愚か者ではなかったことを理解する。所属していた集団に対するトラウマ

で悩むのは人間として自然なことである。

6.いやしによって、安心と平穏があなたにおとずれる。今後、このような状況に悩み続けることはなくなる。

カルトの経験は、中にいる間は居心地の良さと若干の疑念が半ばするものだ。しかし、脱会后、自己を奪われた期間、代償の大きさに気づいた瞬間、トラウマになる。このような人は安心できる場を提供されて初めて自己に向き合うことができる。但し、自助グループの運営は実に難しい。筆者は臨床心理学的な課題には不案内であるので、社会集団論からいくつかの問題点を指摘しておきたい。

第一に、指導者—コアメンバー—周辺メンバー・新メンバーの関係である。この種の集団では人格的な関わりや強い社会化のプロセスを含むために、階梯制になれば、集団構造としてはカルトと大差がなくなる。支配・従属関係が生じないような知恵と技量が指導者とコアメンバーには必要である。

第二に、依存的でケアを求めてくる新メンバーに対して、どのように自立していくことが可能かを示すプログラムと、適切な専門家のアドバイスを受ける機会がグループには必要である。いつまでもメンバーであっては困る。それこそグループへの依存になる。周辺から中心のメンバーへ、そして、「卒業」というプロセスが示されてこそ、治療集団である。

第三に、自助グループとカルト批判運動（反カルト運動）との関わりであるが、原則的に直接つなぐことは避けた方がよい。カルトへの怒りや反動をバネにした運動に自助グループ参加者を巻き込むことは、新たなイデオロギー集団への移し替えにしかならない。自助グループの目的はあくまでも治療や社会復帰にある。その過程を経て一個人として自立できた場合に、自分の経験を生かしたカルト批判はあってもよいが、それも一市民としての声に留まる。専門的な教育や実地研修を経ているからこそ、自己の経験を相対化でき、様々なカルト体験者の経験を適切に聞き取り、支援することができるのである。自助グループにせよ、カルト批判運動にしても、ボランティア・ベースであるから、非専門家が関与する場合が多くなる。しかし、トラウマ治療の実際を側聞するだけでも、これは用意ならざる仕事であることが分かってくる。トラウマは、症状であると同時に疾病の要因をも指し示す概念であり、概念規定や治療方法について論争が尽きない(野口・品田・斉藤, 2005)。

メドレー・ヘブレンが作成したトラウマに関わる症状は次のようなものである。ジュディス・ハーマンの『心的外傷と回復』(ハーマン,1999)をもとにしている。

#### 複雑性外傷後ストレス障害 (Complex Post-Traumatic Stress Disorder)

(不安、衝動行動、攻撃性、過剰警戒、過剰活動、アパシー、抑鬱、不眠、頻脈、高血圧)

1.相当期間にわたる全体主義的支配に服従していたことによる。例えば、人質、戦争捕虜、強制収容所からの帰還者、宗教カルトからの脱会者。家族におけるDV、児童虐待、性的虐待や、組織的性的搾取のサバイバー達が該当する。

2.情動調整に関わる交代が見られる。

- \*持続的抑鬱（見当識障害、錯乱）
- \*自殺念慮の継続
- \*自傷行為
- \*激情的・制御不能の怒り（鎮静する）
- \*強迫神経症的、制御不能の性衝動（鎮静する）

3.意識に関わる交代が見られる

- \*健忘症、或いはトラウマになった出来事に対する記憶増進
- \*過渡の乖離的挿話
- \*離人症、現実感喪失
- \*突然の外傷性ストレス障害発症や没頭型の追体験

4.自己認識における交代が見られる

- \*無力感、無気力
- \*恥、罪意識、自己非難
- \*恥辱や烙印を受けた感覚
- \*他者との距離感（特別な存在、絶対的孤独、誰も分かってくれない、非人間的な人格等）

5.加害者（集団の指導者）への意識における交代が見られる

- \*加害者との関係ばかり考える（或いは復讐に執着）
- \*加害者に絶対的な力を帰属させる非現実的想定（但し、被害者が受けた権力に対する現実感治療者よりリアルなものである）
- \*矛盾した感謝の念を理想化する
- \*超自然的存在との関係を意識する
- \*加害者の信念体系や合理化を受け取る

6.他者との関係における交代が見られる

- \*孤立と退行
- \*親密な関係の分断
- \*救済者を繰り返し求める（孤立と退行に変化することもある）
- \*不信感の持続
- \*自己防衛を繰り返し失敗する

## 7.意味体系における交代が見られる

\*信念の喪失

\*絶望感

このような心理状態や精神の疾病に対して、臨床心理や精神医療の専門がどのように関われば、また、自助グループがどのような治療効果をもたらしているのか、今後検討が待たれるところである。メドー・ヘブンはそこまでの専門的な質問や討議はできなかった。

## 6 結びとして 回復過程と文化差

カルトからの回復を原理的に考察し、アメリカのリハビリテーションの内容を概観してきた。論文の主旨からすれば、原論は参考にしてもらい、事例から学べるところは学んでいただきたいということになるのであるが、かなりの留保が必要であろうと考えている。

原論にしても、事例にしても特定の時代・地域にねざした文化的構築物であることを了解しておいてもらいたい。社会学的発想自体が近代、啓蒙主義の産物であり、自立的な個人と社会契約的な市民社会を前提にしている。境界(バウンダリー)の概念にしても、アメリカの中産階級に顕著な、極めて自立的な人間像、対等に相互契約を結びうる社会関係に基づいている。従って、共同体主義的なカルトの集団構造や教化プロセスは、そのような文化的土壌から考えるだけでも、十分に社会問題化するるのである。

ところが、日本の場合、社会集団が元来共同体的であり、近年その傾向が弱まっているとはいえ、閥、親分子分関係は残存している。宗教的絆を様々な家族的概念で擬制する日本の宗教集団はとりわけ共同体的体質を有している。そのような組織文化に慣れた日本人にとって、分かりやすいカルト問題とは違法行為であり、自我や組織の文化に関わる問題という認識は薄いだろう。しかしながら、カルトからの回復を考える際に、家族や自助グループ、リハビリテーション施設の果たす役割には文化差があることを十分認識して、アメリカの事例に学ぶ必要があると考える。家族の問題に関しては別稿で述べているので(櫻井, 2006)、ここではリハビリテーション施設の際についてのみ言及して稿を閉じたい。

筆者は長野県小諸市にある特定非営利活動法人こもろいずみ会の「いのちの家」に先月滞在させていただいた。カルトのみならずDVのサバイバーや求道的な若者をも対象にした滞在型リハビリテーション施設である。川崎経子先生から様々な話を伺い、いのちの家の雰囲気は若干なりとも味合わせていただいたが、無意識的にメドー・ヘブンの比較をしていた。滞在型のカルト・リハビリテーションの施設は、この2カ所にオハイオ州のウェル・スプリングスを加えた3カ所しか世界にない。その意味では、二カ所の比較でも十分な文化論的考察になる。

両施設の共通点は、外来者に対する開放性(HPや年次総会等による情報開示)、宗教者・ボランティアによる支援(特定教派の付属施設ではない)、所長が私財をつぎ込んだ施設ということである。言うまでもなく、両施設とも緑豊かな自然環境に囲まれ、心を癒すには最

適の地であり、施設長の抱擁的雰囲気もまた共通のものである。

相違点は、経費負担の発想（メドー・ヘブンの方が実質的な滞在費やカウンセリングの経費を徴収するし、契約内容も明示する）、参加者の自主性（いのちの家に入所する人達、特に若者には家族の支援・関与が多い）、プログラムの明確化（ルールと言語化・契約書化についてアメリカ社会は超先進国であり、訴訟対策の面もある）であろう。アメリカの方が普遍化・規範的志向を示し、日本の方は状況即応・属人的対応と言えるかもしれない。前者はマニュアルが作れるし、それを見て入所者が申し込む。後者では、施設管理者の判断と裁量で大まかなプログラムが考案され、回復度合いに応じて臨機応変の対応がなされる。

それぞれに土地柄にあったやり方なのだと思う。アメリカのやり方を直接日本に持ち込んでもうまくいかないだろう。契約や独り立ちへの心構えがそもそも違う。逆もしかりで、日本のかゆいところに手が届くような配慮はスポイルと受け取られてしまうかもしれない。いずれにしても、カルトからの回復には普遍的な方法などなく、文化的背景に応じ、また所属していた教団特有の問題や個人の状況に即した対応が求められるのであろう。

最後になるが、それにしても、全国断酒連盟には 650 団体が加入し(2002 年時点)、AA は全世界に 200 万人からの会員がいるという(2006 年時点)。アルコール摂取に伴う依存症は十分に認知され、専門家・専門治療機関以外に、これだけの自助グループ活動が展開してきた。カルト問題が北米で認知されてから 20 数年たち、ヨーロッパ、日本で認知されてから 10 数年がたつ。しかし、脱会者・サバイバーのサポートに行政や一般市民が心を砕くほどに、カルト問題が社会問題として認知されているとは言い難い。なぜだろうか。

このような問題も含めて、カルト問題を大きな文化的視座でみていかないと、カルトを批判する社会運動が広がっていかないのではないか。今後の研究課題とさせていただきたい。

## 引用文献

Barker, Eileen, 1984, *The Making of a Moonie: Choice or Brainwashing?*, Blackwell Publishers

Bromley, G. David, 2002, 'Dramatic Denouements,' Bromley, G. David and Melton, J. Gordon, *Cults, Religion & Violence*, Cambridge University Press, UK.

Cloud, Henry and Townsend, John, 1992, *Boundaries: When to Say Yes, When to Say No, to Take Control of Your Life*, 2<sup>nd</sup> edition, Zondervan  
中村 佐知, 中村 昇訳, 2005, 『境界線 (バウンダリーズ)—聖書が語る人間関係の大原則』 地引網出版。

Jacobs, Janet 1984: 'The Economy of Love in Religious Commitment: The Deco version of Women from Nontraditional Religious Movements,' JSSR23

ジュディス・ハーマン, 1999, 中井久夫訳 『心的外傷と回復』 みすず書房。

中久郎, 1999, 『社会学原論—現代の診断原理』 世界思想社。

- 西田公昭, 1995, 『マインド・コントロールとは何か』 紀伊国屋書店。
- 野口裕二・信田さよ子・斉藤学, 2005, 「鼎談 この10年を振り返る—AC・共依存・制虐待の記憶をめぐる議論とバッシグー」『アディクションと家族』22-3:232-241
- 櫻井義秀, 2005, 井上順孝編『現代宗教事典』弘文堂。
- 櫻井義秀, 2006, 「「カルト」を問題化する社会とは—第1回 ICSA (国際カルト研究学会) マドリード大会報告—」『宗教と社会』第12号、97-109頁。
- スティーブン・ハッサン, 1993, 浅見定雄訳『マインド・コントロールの恐怖』恒友出版。